ユカギール語の引用表現：引用句における人称直示を中心に

長崎 郁

2024 年 9 月 22 日

1 はじめに …… 1
2 引用句を導入する動詞 mon- について …… 1
2.1 mon- の基本的特徴 …… 1
2.2 副動詞形の mon- の用法 …… 3
2.2.1 他の発話動詞との共起 …… 3
2.2.2 固有名詞の導入 …… 4
2.2.3 副詞節的な構造 …… 4
2.3 定動詞形の mon- の過度の使用 …… 5
3 引用句における人称直示 …… 6
3.1 2 種類の “addressee” …… 7
3.2 引用句における 2 人称 …… 8
3.3 引用句における 1 人称 …… 10
3.4 引用句における 3 人称 …… 11
4 まとめ …… 12

1 はじめに

本稿では、ユカギール諸語の 2 つの変種であるコリマ・ユカギール語とツンドラ・ユカギール語の引用表現に見られるいくつかの特徴を取り上げる。コリマ・ユカギール語の引用表現に関しては Maslova (2003) でその概要が示されている。また、Matić and Pakendorf (2013) は、シベリア諸言語における発話動詞副動詞形の「非標準的」用法の議論の中でコリマ・ユカギール語も扱っている。本稿では、これらの先行研究による知見を踏まえた上で、まず、両ユカギール語に共通して引用句の導入に高頻度で用いられる発話動詞 mon- について記述する。次に、mon- の導入する引用句における「間接話法」的な人称直示について議論を行う[1]。

2 引用句を導入する動詞 mon- について

2.1 mon- の基本的特徴

コリマ・ユカギール語でもツンドラ・ユカギール語でも、引用句の導入に用いられる動詞として頻度が最も高いのは自動詞 mon- 「言う」である。ここではコリマ・ユカギール語の例を示しながら、mon- を述語とする節の基本的な特徴について述べるが、同じことはツンドラ・

1) Krejnovivh (1982)、Nikolaeva (1989)、Nikolaeva (1997)、Maslova (2001)、Kurilov (2005)、Nagasaki (2023) に収録されたテキスト、および筆者が聞き取り調査で得た例文をコーパスとして用いた。形態素分析とグロスおよび和訳は筆者によるものである。

ユカギール語についても言える。

Maslova (2003: 500) は、コリマ・ユカギール語の発話動詞を自動詞的なもの（ann'e-「話す」、n'ied'i-「話す」など）と他動詞的なもの（pundu-「〜を話す」、jowlet'-「〜を尋ねる」など）に分類し、後者は引用句（Maslova (2003) は "speech-reporting element" と呼ぶ）を必ず伴い、それが名詞句である場合は目的語としての標示を受けるとした上で、"the basic speech-act verb" である mon- も（形態的には通常は自動詞としてふるまうものの）他動詞的な発話動詞であると述べている[2)]。

(1) コリマ・ユカギール語 (Nagasaki 2023: 133)
irkin köj mon-i, {pulun-die, kimd'eš, t'ūl'd'ī pundu-k mit-in.}
one man say-INTR.3SG old.man-DIM please tale tell-IMP.2SG 1PL-DAT
「一人の男が言った、『おじいさん、お願いだ、昔話を私たちに話してくれ』」

(2) コリマ・ユカギール語 (Elicited)
met tet-in {irkin ažū-k} mon-te-me.
1SG 2SG-DAT one word-FOC say-FUT-OF.1SG
「私はお前に一言言っておこう」

ただし、pundu- などの他動詞的発話動詞の引用句は名詞句のこともあれば、名詞化されて文中に埋め込まれた節のこともあれば、実際にそう発話されたかのような語の連続（定形節であったり、呼びかけ句であったり、叫び声であったりする）のこともあるが、mon- の導入する引用句が埋め込み節であることは基本的にはないようである。以下の (3) の pundu-「〜を話す」のように mon- が使われた例はほぼない[3)]。

(3) コリマ・ユカギール語 (Maslova 2001: 137)
pulut-ki lot'il ejmie modo-t t'umu pundu-m {qodo modo-l-ōl-gele, qodo
old.man-POSS.3 fire other.side sit-SS all tell-TR.3SG how sit-E-RN-ACC how
ejr-ōl-gele}.
walk-RN-ACC
「彼女の夫は焚き火の向こう側に座ってすべて話した、（彼が）どのように暮らしていたか、どのように歩き回っていたのかを」

---

2) グロスで使用した略号は次のとおり：1/2/3: first/second/third person, ABL: ablative, ACC: accusative, AFF: affirmative, AN: action nominal, CAUS: causative, COM: comitative, DAT: dative, DIM: diminutive, E: epenthesis, FOC: focus, FUT: future, GEN: genitive, IMPF: imperfective, IMP: imperative, INCH: inchoative, INFER: inferential, INS: instrumental, INTERR: interrogative, INTJ: interjection, INTR: intransitive, ITER: iterative, LOC: locative, NEG: negative, NMLZ: nominalizer, OF: object focus, PL: plural, POSS: possessor, PROP: proprietive, PROH: prohibitive, PRSP: prospective, PTCP: participle, PURP: purposive, RN: result nominal, SEQ: sequential, SF: subject focus, SG: singular, SIM: simultaneus, SS: same-subject converb, STAT: stative, TR: transitive

3) mon- の引用句が埋め込み節である唯一の例は次のようなものである。

(i) コリマ・ユカギール語 (Nikolaeva 1989: I-108)
{qodo tā jaqa-t-ōl možū-k} mit-in mon-ŋi-te-l.
how there arriveFUT-RN PRSP-FOC 1PL-DAT say-PL-FUT-OF.3?
「（彼らは）どのようにそこに辿り着けばいいのかを私たちに話すだろう」

“addressee” が mon- の表す事態の参与者である場合、それが明示される際には与格または対格をとる。

(4) コリマ・ユカギール語 (Nagasaki 2023: 132)
emej-gi marqil’-ŋin mon-i, {ta tiŋ šoromo-pul t’āj-e
mother-POSS.3 girl-DAT say-INTR.3SG INTJ this person-PL tea-INS
ōže-š. legi-te-k.}
drink-CAUS(-IMP.2SG) eat-CAUS-IMP.2SG
「彼女の母親は娘に言った、『さあ、この人たちにお茶を飲ませなさい、食事をさせなさい』」

(5) コリマ・ユカギール語 (Nagasaki 2023: 174)
tāt mit-kele mon-i, {d’e jaqte-ŋi-k!}
then 1PL-ACC say-INTR.3SG INTJ sing-PL-IMP.2
「そして（彼は）私たちに言った、『さあ、歌ってくれ！』」

ただし、mon- は addressee の存在しない内的独白（「つぶやく」「独り言を言う」「思う」）を表すこともある。

(6) コリマ・ユカギール語 (Nagasaki 2023: 53)
{qode kebej-te-m? qode šewrej-te-m?} mon-i.
how leave-FUT-INTERR.1SG how escape-FUT-INTERR.1SG say-INTR.3SG
「『（私は）どうやって出ていこうか？（私は）どうやって逃げようか？』（彼は）言った」

2.2 副動詞形の mon- の用法

mon- の副動詞形の一つである monut（コリマ・ユカギール語）/monur（ツンドラ・ユカギール語）には、いくつかの特筆すべき用法がある。

2.2.1 他の発話動詞との共起

一つ目は、他の発話動詞（あるいは思考動詞）と共起して引用句を導入する用法である。コリマ・ユカギール語のこの用法については、Maslova (2003: 502-502) が指摘している。筆者が調べた限り、ツンドラ・ユカギール語にはこの用法の例はない。

(7) コリマ・ユカギール語 (Maslova 2003: 502)
šubeže-de <u>örn’e-je</u>, {met tī l’e-je,} <u>mon-u-t</u>.
run-SS.SIM shout-INTR.1SG 1SG here exist-INTR.1SG say-E-SS
「（私は）走りながら叫んだ、『私はここにいる』と」

(8) コリマ・ユカギール語 (Maslova 2003: 503)
jaqa-delle numö-ge <u>n’ied’ī-l’el</u> {tātmie-d’ōd-ek juö-me,}
arrive-SS.SEQ house-LOC tell-INFER(-INTR.3SG) be.like.that-PTCP.NMLZ-FOC see-OF.1SG
<u>mon-u-t</u>, {āt’e-gi kurčeŋ-n’e n’ahā amd-ō-t qodō-pe-gi}
say-E-SS reindeer-POSS.3 crane-COM together die-STAT-SS lie-PL-POSS.3

「（彼女は）家に着いて話した、『（私は）こういうのを見た』と、『彼のトナカイがツルと一緒に死んで横たわっていた』と」

(9) コリマ・ユカギール語 (Nikolaeva 1989: I-100)
{qadun-ge l'e?} mon-u-t joulos'-u-m tude nume-get.
where-LOC exist(-INTERR.3SG) say-E-SS ask-E-TR.3SG 3SG:GEN house-ABL
「『（あいつは）どこにいるんだ？』と（彼は）自分の家に尋ねた」

(10) コリマ・ユカギール語 (Nagasaki 2023: 166)
{met {ien paj} mon-u-t t'uŋre-je,} mon-i.
1SG other woman say-E-SS think-INTR.1SG say-INTR.3SG
「『私は（家にいるのがお前ではなく）「他の女だ」と思っていたよ』と（彼は）言った」

2.2.2 固有名詞の導入

二つ目は固有名詞を導入する用法である。これもツンドラ・ユカギール語の例は見つかっていない。

(11) コリマ・ユカギール語 (Nikolaeva 1989: I-92)
šoromo l'e-l'el örd'ō-l lebie-ge {petr_berbekin} mon-u-t.
person exist-INFER(-INTR.3SG) be.middle-AN land-LOC PieterBerbekin say-E-SS
「ピエテル・ベルベキンという人が中界にいた」

2.2.3 副詞節的な構造

三つ目は、引用句と monut ／ monur が全体で副詞節のように解釈される用法である。コリマ・ユカギール語にもツンドラ・ユカギール語にも見られる。まず、理由・原因節の解釈が可能な例を示す。

(12) コリマ・ユカギール語 (Nikolaeva 1989: I-72)
{šoromo l'e-l'el,} mon-u-t ajā-j tiŋ uöŋō-d'e šoromo.
person exist-INFER(-INTR.3SG) say-E-SS rejoice-INTR.3SG this be.young-PTCP person
「人がいるようだったので、その若者は喜んだ」

(13) ツンドラ・ユカギール語 (Kurilov 2005: 456)
jalmist'e köde jaba-je rukun-hane igije-lek me=soŋde-m, wajhaj-ŋu-te-j
the.third person die-PTCP thing-ACC rope-INS AFF=tie-TR.3SG flow.away-PL-FUT-INTR.3
mon-u-r, t'irej-ŋu-te-j mon-u-r.
say-E-SS sink-PL-FUT-INTR.3 say-E-SS
「三人目の人は（トナカイの）死体をロープで結びつけた、流れて行ってしまいそうなので、沈みそうなので」

次に、目的節的な解釈が可能な例を示す。目的節の解釈が可能なのは引用句が命令文のときである。(14)、(15) の引用句は 2 人称主語の命令文、(16)、(17) の引用句は 3 人称主語の命令文である。

(14) コリマ・ユカギール語 (Maslova 2001: 141)

tittel met-kele edie-s'-ŋā, {kelu-k,} mon-u-t.

3PL 1SG-ACC call-ITER-PL:TR.3 come-IMP.2SG say-E-SS

「彼らは私を呼んだ、(彼らのところへ) 来るように」

(15) ツンドラ・ユカギール語 (Kurilov 2005: 214)

{t'amu-mu-r,} mon-u-r {kuril'ī-k,} tuŋn'eŋ kī-ŋ.

be.big-INCH-E-SS say-E-SS remember-IMP.2SG this.one give-TR.1SG

「大人になったら (私を) 思い出すよう、(私はお前に) これを与えよう」

(16) コリマ・ユカギール語 (Nikolaeva 1989: II-6)

taŋ parā-get bjuč]jun end'ōn jōbī end'ōn-gele amun-dē-jle omos' penī-ŋā

that time-ABL various animal forest animal-ACC bone-POSS.3-ACC well put-PL:TR.3

{lebie-n emej t'istoŋō-gen, amun tī-tā el=pejžī-l-ō-gen,} mon-u-t,

land-GEN mother be.clean-IMP.3SG bone here-there NEG=throw-E-STAT-IMP.3SG say-E-SS

{ejre-din omo-gen,} mon-u-t.

walk-PURP be.good-IMP.3SG say-E-SS

「そのときから色々な動物、森の動物の骨をきちんと置く、大地の母が清潔であるように、骨があちこちに投げられていないように、気持ちよく行き来できるように」

(17) ツンドラ・ユカギール語 (Kurilov 2005: 130)

nime-ŋin' ōrt'i-nun-ŋa, {sew-han} mon-u-r.

house-DAT instruct-IMPF-PL:TR.3 enter-IMP.3SG say-E-SS

「(そのチュクチ人たちは彼に) 家の方を指し示した、(そこに) 入るように」

2.3 定動詞形の mon- の過度の使用

引用内容を導入する表現は、引用内容の前か後、あるいは中にも置かれうるが、接続詞、主語名詞句などを伴った文としての性格がより強い引用導入表現 (長い引用導入表現) は引用句の前に置かれることが多い。また、このような引用句導入表現には mon- だけでなく、さまざまな発話動詞が使われる。一方、定動詞の人称語尾を伴った mon- が単体で引用導入表現として使われることもある (短い引用導入表現)。これは引用内容の後が多いが、中に置かれることもある。

(18) コリマ・ユカギール語 (Nagasaki 2023: 9)

jal'ōd'e mon-i, {met el=t'īle-n'-d'e}, mon-i.

sun say-INTR.3SG 1SG NEG=power-PROP-INTR.1SG say-INTR.3SG

「太陽が言った『私は強くない』(彼は) 言った」

(19) ツンドラ・ユカギール語 (Maslova 2001: 26)

{met leml'e,} mon-i, {met-in' jan kazak-qat ki-k.}

1SG headman say-INTR.3SG 1SG-DAT three cossak-ABL give-IMP.2SG

「『閣下』(彼は) 言った、『私に 3 人のコサックをください』」

コリマ・ユカギール語では、1 つの引用内容がその中に短い引用導入表現を何度も伴うこともある。

(20) コリマ・ユカギール語 (Nagasaki 2023: 22)

tāt debegej mon-i, {t'ūl'd'ī_pulut}, mon-i, {ē met t'ohoje-d abut
then Debegei say-INTR.3SG ogre say-INTR.3SG INTJ 1SG knife-GEN case
joŋrā-l'el-me}, mon-i, {nume-ge. tamun t'ūd'ī-t tet-kele
forget-INFR-OF.1SG say-intr.3sg house-LOC that.one play.a.trick-SS 2SG-ACC
el=iŋru-š-u-t. mundej-k jaq!
NEG=sleep-CAUS-E-FUT(-INTR.3SG) fetch-IMP.2SG INTJ

「そしてデベゲイは言った、『人食い鬼よ、』（彼は）言った、『私はナイフ入れを忘れてしまった、』（彼は）言った、『家に。それは化けてでてお前を寝かせないだろう』」

(21) コリマ・ユカギール語 (Nagasaki 2023: 157)

met mo-d'e, {kelu-k, kel-ŋi-k, juö-ŋi-k,} mo-d'e {lem-dik,}
1SG say-INTR.1SG come-IMP.2SG come-PL-IMP.2 see-PL-IMP.2 say-INTR.1SG what-PRED
mo-d'e {anil?} mo-d'e {interesnyj anil-ek. d'el'onaŋō-j,}
say-INTR.1SG fish say-INTR.1SG interesting(Rus.) fish-PRED be.green-INTR.3SG
mo-d'e.
say-INTR.1SG

「私は言った、『来て、来て、見て、』（私は）言った、『何だろう』（私は）言った、『（この）魚は』（私は）言った、『面白い魚だ、緑色だ』（私は）言った」

このような短い引用導入表現の使用は、Malchukov (2000: 462) が指摘するエウェン語における発話動詞 göön- の過剰使用によく似ており、言語接触によって生じた類似の可能性がある。

3 引用句における人称直示

コリマ・ユカギール語でもツンドラ・ユカギール語でもテキスト中の mon- の導入する引用句の多くは直接話法的であり、引用句が表す事態の参与者への人称の割り当ては発話者の視点に従うのが普通である。しかし、人称の割り当てが間接話法的、つまり明らかに発話者ではなく引用者の視点に従っていると見なすことのできる例も存在する。ただし、英語のように直接話法と間接話法がある程度自由に転換できるというわけではなく、引用者の視点を引用句の人称に反映する（あるいは反映し易い）条件というのがあるように思われる[4)]。以下では、引用句における 2 人称、1 人称、3 人称の順に用例を検討してゆくが、それに先立って、発話動詞と関係をもつ意味役割のひとつとされる "addressee" を発話場面への関与の仕方から 2 種類に分ける必要のあることを述べる。

4) 直接話法が標準である引用句の人称直示に、原則を逸脱して引用者の視点が反映される現象に関しては、Aikhenvald (2007)、Evans (2012) などによる事例の報告と議論があるが、シベリアの諸言語に関しては研究が進んでいないようである。

3.1 2 種類の “addressee”

addressee は、speaker（発話者・話し手）、message（メッセージ）、medium（媒体）と共に、発話動詞と関係をもつ意味役割のひとつとされ（例えば、Dixon (1991, 2005)）、「聞き手」あるいは（メッセージの）「受け手」などと和訳される。addressee はまた、伝達場面の参加者の役割を指すこともあり、Lyons (1977: 34) は伝達場面に参加してシグナルを受け取る者は、単に発話を耳にする・しただけの者と、（発話者によって）意図された者に分かれることを指摘した上で、前者を audience、後者を addressee と呼んでいる。

speaker、addressee、audience は人称直示カテゴリーの構成要素とされることもあり、Fillmore (1997) はこれら 3 つを次のように定義している。

(22) a. speaker: the speaker of the utterance, the sender of the message, what grammarians call the “first person”

発話者：発話を話した者、メッセージの送り手、文法家が「1 人称」と呼ぶもの

b. addressee: the addressee of the message or utterance, the messages’ intended recipient, what we usually refer to as the “second person”

聞き手：メッセージあるいは発話の聞き手、メッセージの意図された受け取り手、我々が普通、「2 人称」として言及するもの

c. audience: a person who may be considered part of the conversational group but who is not a member of the speaker/addressee pair

聴衆：会話グループの一部と見なせるかもしれないが、発話者／聞き手のペアに含まれないもの

意味役割としての addressee とは発話場面にいる者なのかどうか、筆者はそのような定義を見つけることはできなかったが、言葉による伝達や人称直示の研究における addressee はメッセージが発せられる場に存在するということが前提となっている。

ユカギール語の発話動詞 mon- の addressee 項の指示対象も多くの場合、(23) のように、発話者の傍らにいると理解できる。

(23) コリマ・ユカギール語 (Nagasaki 2023: 132)

男たちが、父親、母親、娘、その弟から成る家族を訪ねてきた。

emej-gi marqil’-ŋin mon-i, {ta tiŋ šoromo-pul t’āj-e
mother-POSS.3 girl-DAT say-INTR.3SG INTJ this person-PL tea-INS
ōže-š. legi-te-k.}
drink-CAUS(-IMP.2SG) eat-CAUS-IMP.2SG

「彼女の母親は娘に言った、『さあ、この人たちにお茶を飲ませなさい、食事をさせなさい』と」（= (4)）

しかしながら、addressee がメッセージの受け手ではあるが、発話場面の参加者でないこともある。(24) では、addressee である王は、商人の息子が川に落ちた現場にはおらず、そのメッセージを別の場所で、引用者（＝キツネ）を介して受け取っている。

(24) コリマ・ユカギール語 (Nikolaeva 1989: I-56)
キツネが王のところへ行き、言った。
t'ugōn, kupets aduö-k ōžī-ge löudū-l. tabun tet-in mon-i, {kejl'ō-d'e
hurry merchant son-FOC water-LOC fall-SF that.one 2SG-DAT say-INTR.3SG be.dry-PTCP
omo-s'e n'ier-gele jan-gen.} t'ugōn kej-k, qon-te-t.
be.good-PTCP cloth-ACC send-IMP.3SG hurry give-IMP.2SG go-CAUS-FUT(-TR.1SG)
「急げ、商人の息子が川に落ちてしまった、それ（＝商人の息子）がお前（＝王）に言った、『乾いた良い服を送らせろ』と。早くくれ、（私が）持って行こう」

以下では、このような 2 種類の addressee を区別するために、(23) に類する addressee を直接の受け手（immediate addressee）と、(24) に類する addressee を離れた受け手（remote addressee）と呼ぶことにする。また、発話場面においてメッセージを送る者を発話者、引用の場において発話事象について述べている者を引用者、引用の場において引用者のメッセージが向けられている者を聞き手と呼ぶことにする。

3.2 引用句における 2 人称

引用句において 2 人称として表現されるのは、直接話法であれば発話場面におけるメッセージの直接の受け手である。しかし、コリマ・ユカギール語でもツンドラ・ユカギール語でも、引用句における 2 人称が引用の場における聞き手を指すことがある。

以下の 2 つの例で、引用句中の動詞の 2 人称語尾が指しているのは、引用の場における聞き手の「デベゲイ（人名）」、「兄」であり、これらは発話場面には居合わせていない。(25) において mon- の addressee 項である 2 人称代名詞が指示するのも「デベゲイ」だが、これらはメッセージの離れた受け手である。

(25) コリマ・ユカギール語 (Krejnovivh 1982: 287)
人喰い鬼がデベゲイに言った。
... tet emej tet es'ie, tet emd'e-pul, tet terike, tet t'udit'e-pul, t'umut
2SG mother 2SG father 2SG younger.sibling-PL 2SG wife 2SG relative-PL all
l'e-ŋi. tet-kele mon-ŋi {kelu-k}.
exist-PL.INTR.3 2SG-ACC say-PL.INTR.3 come-IMP.2SG
「...お前の母親、父親、弟たち、妻、親戚たちはみんな（あそこに）いた。（彼らは）お前に言った、『（お前（＝デベゲイ）が彼らのところへ）来い』と」

(26) ツンドラ・ユカギール語 (Kurilov 2005: 276)
若者が父の命を受けて兄のところに行き、言った。
amā mon-i, {ewre-j rukun ket'i-k.}
father say-INTR.3SG walk-PTCP thing bring-IMP.2SG
「父さんが言った、『（お前（＝兄）が）オオカミを連れて来い』と」

引用句を導入しているのはいずれも mon- を述語とする 3 人称主語の平叙文であり、これらの例は「引用者が特定の第三者による聞き手についての発話を報告している」という共通性

をもつ。この種の例では、引用句が 2 人称主語の命令文のことが多いが、(27) のように引用句が平叙文のこともある。この例でもやはり mon- の addressee 項が離れた受け手であること、また、引用句における 1 人称は発話者である「クマ」を指すことにも注目されたい。

(27) コリマ・ユカギール語 (Nikolaeva 1989: I-60)
キツネがクマと別れて行く途中で人間を見つけ、その人間に言った。
t'āt'ā mēmē tet-kele mon-i {met jūs'ed-ej-lukene, tet önme
elder.brother bear 2SG-ACC say-INTR.3SG 1SG breathe-PFV-1|2:COND.DS 2SG mind
šohušā-nu-mek}
lose-IPFV-TR.2SG
「兄よ、クマがお前に言った、『私（＝クマ）が強く息をしたら、お前（＝人間）は気を失う』と」

(28) と (29) でも、引用句中の 2 人称代名詞が指すのは引用の場における聞き手、「老人」および「木」である。また、これらは発話場面には居合わせていない。先に見た例と異なるのは、これらの例において引用者が報告している発話は不特定の第三者によるという点である。言い換えれば、mon- を述語とする引用句導入表現が伝聞形式のような性格をもつと言える[5)]。

(28) コリマ・ユカギール語 (Nagasaki 2023: 133)
老人が男たちに自分たちを訪ねて来た理由を問い、男の一人が老人に言った。
mon-ŋi. šoromo-pul mon-ŋi, {tit-ke omo-t'e marqil'
say-PL.INTR.3 person-PL say-PL:INTR.3 2PL-LOC be.good-PTCP girl
l'ie-l'el.}
exist-INFER(-INTR.3SG)
「（人々は）言う。人々は言う、『あなた（＝老人）がたに美しい娘がいる』と」

(29) ツンドラ・ユカギール語 (Kurilov 2005: 242)
インメ（人名）が木のところへやって来て、言った。
mon-ŋi {tet-ek werwe-l}
say-PL.INTR.3 2SG-FOC be.strong-SF
「『強いのはお前（＝木）だ』と言われている」

ここまでの例から明らかなように、引用句の表す事態の参与者への 2 人称の割り当てが引用者の視点からなされるのは、基本的には引用の場における聞き手が発話場面の参加者でないときのようである。例外的に (30) と (31) では、聞き手である「ピエテル・ベルベキン（人名）」、「夫」が発話場面における発話者でもある。

(30) コリマ・ユカギール語 (Nikolaeva 1989: I-106)
化け物がピエテル・ベルベキンに言った。
me=mo-d'ek {jūke jaqa-te-jek}?
AFF=say-INTR.2SG far arrive-FUT-INTR.2SG

5) Aikhenvald (2004: 64) は、伝聞（hearsay）を "for reported information with no reference to those it was reported by" と定義している。

「『自分が遠くに行き着くだろう』と（お前は）言っているのか？」

(31) コリマ・ユカギール語 (Nikolaeva 1997)
おばあさんが夫に言った。
titt-in mon, {mə=es'ē-pə-gi o-ǰək omon,}
3PL-DAT say(-IMP.2SG) AFF=father-PL-POSS.3 COP-INTR.2SG indeed
「彼ら（子供たち）に言え、『（お前は）確かに彼らの父親だ』と」

ただし、「聞き手」イコール「発話者」の場合に、それが引用句において 1 人称として表現されることもある。

(32) コリマ・ユカギール語 (Nikolaeva 1989: I-60)
キツネがクマに言った。
tīne mo-d'ek, {met jūs'ed-ej-lukene, önme-le šohošā-nu-m.}
before say-INTR.2SG 1SG breathe-PFV-1|2:COND.DS mind-INS lose-IPFV-E-TR.3SG
「以前、お前は言った、『私が強く息をしたら、（そいつは）気を失う』と」

3.3 引用句における 1 人称

引用句において 1 人称として表現されるのは、直接話法であれば発話場面における発話者である。しかし、引用句における 1 人称代名詞や動詞の 1 人称語尾がむしろ引用者を受けているということがある。ただし、コリマ・ユカギール語でもツンドラ・ユカギール語でも例は少なく、どのような場合に引用句の表す事態の参与者への 1 人称の割り当てが引用者の視点からなされるのか結論を得ることはできない。本節ではいくつかの例を示すに留めることにする。

以下の 2 つの例はツンドラ・ユカギール語のものである。(33) では、引用者が不特定の第三者による発話を報告している。(34) は、副動詞形の monur と引用句を理由・原因節として解釈することができる。

(33) ツンドラ・ユカギール語 (Maslova 2001: 53)
女性が自身が結婚した時のことを話している。
met ile-hane mārqad lugu-je-d apanalā wegie-l'el-u-m.
1SG reindeer-ACC one be.old-PTCP-GEN old.woman transport-INFER-E-TR.3SG
mon-nun-ŋi, {met peldudie qoj-d-en'ie-gi.}
say-HBT-PL:INTR.3 1SG husband god-GEN-mother-POSS.3
「私のトナカイを一人の老婆が運んできた。『（その老婆は）私の夫の教母だ』と言われていた」

(34) ツンドラ・ユカギール語 (Kurilov 2005: 202)
少年に彼の両親が話している。
mit-qane, mon-u-r, {me=lugu-mu-jeli}, el=pun'-ŋu
1PL-ACC say-E-SS AFF=be.old-INCH-INTR.1PL NEG=kill-PL.INTR.3
「（そのチュクチ人たちは）私たちを、『（私たちは）年老いている』と言って（（私たちは）年老いているので）、殺さなかった」

以下はコリマ・ユカギール語に見られる唯一の例である。Maslova (2003) はこれを間接疑問文と分析している。

(35) コリマ・ユカギール語 (Maslova 2001: 141)
若者たちが老人に対して：
mit-in mon, {qodo gudie-t-ōk, qodo ā-t-ōk?}
1PL-DAT say-IMP.2SG how become-FUT-INTERR.1PL how do-FUT-INTERR.2PL
「私たちに教えてくれ、『(私たちが) どうなるか、どうするか』を」

3.4 引用句における 3 人称

発話場面におけるメッセージの直接の受け手は、直接話法であれば、引用句において 2 人称として表現される。また、発話者は引用句では 1 人称として表現される。しかし、これらの発話場面の参加者が引用句において 3 人称として表現されることがある。得られている例はツンドラ・ユカギール語のものがほとんどであり、コリマ・ユカギール語の例は非常に少ない。(36) では、引用句の 3 人称主語命令文の表す行為の遂行を促されているのは、mon- の addressee 項、つまり、主格名詞句の「兄」である。

(36) ツンドラ・ユカギール語 (Kurilov 2005: 276)
男に彼の父親が言った。
akā mon-īt'e-k, {köre-le ket'i-han}
elder.brother say-VEN-IMP.2SG devil-ACC bring-IMP.3SG
「(お前は) 兄に言いに行け、『(彼が) 悪魔を連れて来るように』と」

以下は、コリマ・ユカギール語の例である。この例の引用句はコピュラ文だが、コピュラの補語の伴った 3 人称所有者標識 -gi が指しているのは mon- の addressee 項、つまり与格名詞句の「彼ら」である (なお、3.2 で述べたように、この例は、引用の場における聞き手が発話場面における発話者でもあるが、引用句におけるコピュラの語尾が引用者の視点を採って 2 人称となっている)。

(37) コリマ・ユカギール語 (Nikolaeva 1997)
おばあさんが夫に言った。
titt-in mon, {mə=es'ē-pə-gi o-jək omon,}
3PL-DAT say(-IMP.2SG) AFF=father-PL-POSS.3 COP-INTR.2SG indeed
「彼ら (子供たち) に言え、『(お前は) 確かに彼らの父親だ』と」(= (31))

上記の 2 つの例で引用句を導入しているのは mon- を述語とする 2 人称主語の命令文であり、これらは「引用者が聞き手に対して第三者による・あるいは自身による行為遂行を促すよう要求している」という共通性をもつ。

ただし、同じような場合に発話場面におけるメッセージの直接の受け手が引用句において 2 人称として表現されることもある。

(38) ツンドラ・ユカギール語 (Kurilov 2005: 244)
仔トナカイがオオカミに言った。

idarāne tet uor-pie-n' mon-nun-k {qun'enburewre
in.the.future 2SG child-PL-DAT say-HBT-IMP.2SG three.year.old.male.reindeer
ŋol-ā-l'el-d'e talaw el=taŋudu-nul-l'eŋik.}
COP-INCH-INFER-PTCP wild.reindeer NEG=chase-HBT-PROH.2PL
「これからはお前の子供たちに言え、『3 歳になったトナカイを追いかけるな』と」

副動詞形 monur と引用句が目的節として解釈可能な例でも、monur が明示されてはいないがメッセージの受け手を項として伴っており、引用句においてはそれを 2 人称ではなく 3 人称で言及している、つまり発話者ではなく引用者の視点が採られている場合がある。

(39) ツンドラ・ユカギール語 (Kurilov 2005: 130)
nime-ŋin' ōrt'i-nun-ŋa, {sew-han} mon-u-r.
house-DAT instruct-IMPF-PL:TR.3 enter-IMP.3SG say-E-SS
「(そのチュクチ人たちは彼（エジルウェイ）に）家の方を指し示した、（そこに）入るように」（= (17)）

また、副動詞形 monur と引用句が目的節として解釈可能な例の中には、monur の明示されていない主語が引用句において 3 人称として表現されていると見なせるものがある。次の (40) において、引用句中に現れた 3 人称所有標識 -gi が指しているのは、この文全体の主語「彼」であり、この 3 人称は引用者の視点を採っている。もし、引用句の人称が発話者の視点を採っていれば、引用句は met jawul lalwaj-han [1SG track be.covered-IMP.3SG] となるはずである。

(40) ツンドラ・ユカギール語 (Kurilov 2005: 130)
sukun erime-r-nā-qa qaldej-l'e-n', mon-u-r {jawul-gi
thing snow-PROP.INCH-INCH-LOC escape-INFER-INTR.3SG say-E-SS track-POSS.3
lalwej-han.}
be.covered-IMP.3SG
「(彼は）雪が降り出し始めると逃げた、彼の足跡が隠れるように（『彼の足跡が隠れるように』と考えて)」

4 まとめ

- ユカギール語における発話動詞 mon- によって導かれる引用句における人称の割り当ては、基本的には発話者の視点を採るが、引用句における 2 人称、1 人称、3 人称のそれぞれについて、発話者の視点ではなく、引用者の視点からその割り当てが決まることがある。
- 特に、引用句における 2 人称が引用者の視点を採るケース、つまり引用の場における聞き手を指すケースはコリマ・ユカギール語とツンドラ・ユカギール語の両方に一定数の例が見つかっている。これらの例は「引用者が特定の第三者による聞き手についての発話を報告している」場合、あるいは「引用者が不特定の第三者による聞き手についての発話を報告している」場合がほとんどである。
- 引用句における 1 人称が引用者の視点を採るケース、つまり引用者を指すケースは全体として数が少ない。

- 引用句における 3 人称が引用者の視点を採るケース、つまり発話場面におけるメッセージの直接の受け手、あるいは発話者を指すケースはツンドラ・ユカギール語には一定数の例が見つかっているが、コリマ・ユカギール語の例はほぼない。
- ツンドラ・ユカギール語には 3 つの人称すべてに関わる例があるが、コリマ・ユカギール語では、1 人称と 3 人称に関わる例があまりないということは、引用者視点を取りやすい人称とそうでない人称があり、それが 2 つの言語における用例数の違いに反映されているということなのだろうか → コーパスの規模が小さすぎるため、確定的なことは今のところ言えない。
- 近隣の諸言語における状況はどうなっているのだろうか。

参考文献

Aikhenvald, Alexandra Y. 2004. *Evidentiality.* Oxford: Oxford University Press.

Aikhenvald, Alexandra Y. 2007. Semi-direct speech: Manambu and beyond. *Language Sciences*, 30: 383–422.

Dixon, R. M. W. 1991. *A new approach to English grammar, on semantic principles.* Oxford: Calarendon Press.

Dixon, R. M. W. 2005. *A Semantic Approach to English Grammar.* Oxford: Oxford University Press.

Evans, Nicholas. 2012. Some problems in the typology of quotation: A canonical approach. In: Dunstan Brown, Marina Chumakina, and Greville G. Corbett (eds.) *Canonical Morphology and Syntax Canonical Morphology and Syntax*, pp.66-98. Oxford: Oxford University Press.

Fillmore, Charles J. 1997. *Lectures on Deixis.* Stanford: CSLI Publications. newblock (originally distributed as Fillmore (1975/1971) *Santa Cruz Lectures on Deixis* by the Indiana University Linguistics Club)

Krejnovich, E. A. 1982. *Issledovanija po jukagirskomu jazyku.* Leningrad: Nauka.

Kurilov, Gavril N. (ed.) 2005. *Fol'klor jukagirov.* Moscow/Novosibirsk: Nauka.

Lyons, John. 1977. *Semantics*, Volume 1. Cambridge: Cambridge University Press.

Malchukov, Andrej L. 2000. Perfect, evidentiality and related categories in Tungusic languages. In: Lars Johanson and Utas Bo. *Evidentials: Turkic, Iranian and Neighbouring Languages*, pp.441-470. Berlin, Boston: Mouton de Gruyter.

Maslova, Elena. (ed.) 2001. *Yukaghir Texts.* Wiesbaden: Harrassowitz.

Maslova, Elena. 2003. *A Grammar of Kolyma Yukagir.* Berlin/New York: Mouton de Gruyter.

Matić, Dejan and Brigitte Pakendorf. 2016. Non-canonical SAY in Siberia: Areal and geneological patterns. *Studies in Language*, 37(2): 356–412.

Nagasaki, Iku. (ed.) 2023. *Kolyma Yukaghir Texts.* (Materials of Siberian Languages 8). Nagoya.

Nikolaeva, Irina. (ed.) 1989. *Fol'klor jukagirov Verxnej Kolymy*, I-II. Yakutsk: Yakut State University Press.

Nikolaeva, Irina. (ed.) 1997. *Yukagir Texts.* Savariae: Berzsenyi Hochschule.